

## BUSINESS

ビジネストーク

## TALK

# 「自然環境との共生」

頭取 高橋 祥二郎



2007年に環境対応型金融サービス「カーボ  
ンニュートラルローン 未来よし」を取扱開始して、

本年で10年目を迎えました。これは、当行の環境対  
応型融資商品のご利用により太陽光発電システム  
等を導入されたお客さまの金利を優遇させていた  
だくとともに、環境設備の導入で削減された温室  
効果ガスを当行が推計。排出権取引価格を参考  
に金額換算して、ニゴロブナ・ワタカの放流事業に  
資金を拠出することで、地球環境保全と琵琶湖の  
固有種の保護・育成を目指すものです。また、ニゴ  
ロブナは滋賀県を代表するスローフード「ふなず  
し」の原材料であり、湖国の食文化を守り、継承し  
ていくことも大きな目的の一つです。15年度のこ  
利用実績は350件の65億1300万円で、これ

までにニゴロブナ約33万匹、ワタカ約24万匹を放  
流いたしました。

ニゴロブナの漁獲量は、88年の198トンから減  
少を続けて97年には18トンまで落ち込みましたが、  
14年には51トンまで回復しました。公益財団法人  
滋賀県水産振興協会によれば「水揚げされるニゴ  
ロブナのうち、3割から4割が放流事業によるも  
のと推計される」とのことであり、10年間にわたる  
当行の取り組みも、琵琶湖の生態系保全に幾らか  
貢献できたのでは、と喜びもひとしおです。

北湖の深部に生息する琵琶湖固有種の「ビワマ  
ス」もニゴロブナと同様に漁獲量が激減していま  
したが、昨今は放流事業の成果もあり回復しつつ  
ある、とお聞きしました。当行も13年から米原市の

「ビワマス遡上プロジェクト」に参画。役職員が自  
宅の冷蔵庫で卵を孵化させて稚魚に育て、丹生川  
上流に放流しています。琵琶湖の宝石とも呼ばれ  
るビワマスは、トロのような味わいと琵琶湖で唯一  
トロリリングができる魚として注目を浴びており、  
地域の特産品としてのブランド化や観光振興への  
期待も高まっています。

さて、北米にある五大湖は、1800年代に始  
まった運河開発により、外来種の「ウミヤツメ」が  
侵入して、食物連鎖の頂点に位置していたレイク  
トラウトが激減した結果、小魚が大量発生して水  
質が悪化しました。その対策として、これらの小魚  
を捕食するキングサーモンが大量に放流された結  
果、水質は良化したものの、一方では他の固有種の  
減少を招くなど、五大湖の生態系に大きな影響を  
与えました。また、キングサーモンの移植により、  
五大湖はサーモンフィッシングなど北米を代表す  
るスポーツフィッシングの拠点の一つとはなりまし  
たが、生態系保全の観点からは悩ましい限りです。

琵琶湖には約千種類の水生動植物と約60種類の  
固有種が存在するといわれています。琵琶湖の環境  
保全については、北米・五大湖の事例をみても、地域  
の自然や文化、歴史を念頭に置きながら、私たち自  
身の身近な問題と捉えて対処することが大切です。  
そして、限りある琵琶湖の自然環境と地域文化との  
共生を図るとともに、次世代に確かな形で“贈る”  
ことが、今を生きる私たちの使命だと考えます。